友達、親友、友情

平成十四年　五年女児

「あっ、みながいる。」

みなは、私の親友の一人です。その彼女を見てぎくっとしたのです。なぜなら、みなに内緒で、もう一人の親友のはーちゃんと二人だけで出かけてしまったからです。

みなは、みなみさん、はーちゃんは、春香さんです。私達は同じ五年生の仲良し三人組です。

四年生の二学期ごろからなぜか一緒に行動することが多くなり、どんどん仲良くなった私達です。みなは、一番しっかり者で、はーちゃんはおしゃれ好き。三人とも心がやさしい人です。例えば、みなは雨の日にと中までかさに入れてくれて、別れぎわに、

「私はかさがあるから。」と言って、自分の着ていたジャンバーをぬぎ、私にかしてくれました。はーちゃんは、ぜんそくがちな私が休むたびに連絡ぶくろに手紙を入れてくれました。私は、そんな二人が大好きです。

それなのに、今、私は何をしたんだろう。みなの姿を見たとたん、頭が真っ白になり、暗く深い谷底へつき落とされたような気持ちになりました。にげるように急いで自転車をとめました。そして、はーちゃんと私の家に入りました。

門の前では、みなが一人で待っているにちがいありません。

「みないたね。やっぱり気づいたかな。」

「うん。たぶんね。どうしよう、なんて言おうか。」

「やっぱ、素直にあやまる？」

私は一しゅんごまかす言葉を考えましたが、やっぱり親友にはうそはつけないと思ってあやまることにしました。

門の前で待っているみなの後ろ姿を見ただけで、泣いているように見えました。私は、軽い気持ちで適当にごまかすつもりで、はーちゃんと出かけました。でも、いざとなると、何も言いわけできませんでした。それはきっと、今まで何をするにも一緒で、うそは一度もついたことの

ない仲だったからです。
それから、以前こんなこともありました。
夏休みの学校のキャンプの帰り、みなのお母さんとみなの妹とも一緒に帰りました。そのと中、みなのお母さんが、
「仲いい友達だのう。」と言ったとき、みなが、
「ちがうよ。し・ん・ゆ・うだよ！」と言ってくれました。
私は、言葉に表せないくらいうれしくなりました。
それなのに私は、大好きな人、しかも親友をきずつけてしまい、罪悪感をものすごく感じました。その気持ちは、はーちゃんも味わったと思います。ごめんね。ゆるしてみな。本当にごめん。私の頭の中をその言葉が走り回ります。いつになっても止まりませんでした。
やがて、みなが泣きやむと、私の頭の中を走り回っていたあの言葉も、やっとのことで消えました。私は、暗く深い谷底から助けられた気がしました。
そんなことがあってから、一、二ヶ月。今は、三人一緒に元気にはしゃいでいます。私たちのトレードマークは「みつば」です。その名前が決まってからは、図工の絵、おそろいで買った。ペンダントにまでみつばの絵がかいてあります。特に、ペンダントやおそろいの小物などは「みつばお守り」と呼んでいます。
そして、たいていの人は、「みつば」より「よつば」の方が幸せになれると思っている人が多いと思います。でも、はーちゃんやみな、私からすれば「みつば」の方が、三人一緒の意味で幸せになれると思ったのです。
中学校までは同じ学区でかわりありませんが、その後に続く高校や大学もずっと一緒に仲良し三人組でいられたらいいなと思います。